

被災地の記憶を地図にアーカイブする—宮城県多賀城市



写真①・② 「震災記憶地図」で地図×新聞アプリを作る (2015年6月2日, 宮城県立多賀城高等学校にて)

1. はじめに

iPad (iPhone) 用の無料アプリに「震災記憶地図」というものがあります (<http://eq.stroly.com/about>)。京都の ATR-Creative 社が出している「地図ぶらり」という地図閲覧アプリのシリーズの一つで、通常は自治体から提供を受けた地図を有償で公開しているのに対して、このアプリは一般のユーザーが地図を同社のサーバーに登録して共有することができます (ただし対象となる地図は被災地限定で、一般公開にあたっては地図の著作権者の許諾が必要です)。このアプリを、東北地方にある高校の防災教育に使ってもらおうということで、2015年から宮城県立多賀城高等学校にお邪魔して教材作りを進めています。本項では、この取り組みを通じて「地図に情報を集約して公開する」活動を通じた防災教育を考えてみたいと思います。

2. 新聞記事を地図に埋め込む

宮城県立多賀城高校は1976年創立の普通科高校で、2016年度に日本で2番目となる防災専門学科 (災害科学科) を開設しました。普通科の科目に加えて、防災に関わる学校特設科目を置き、新

入生は入学と同時にタブレットコンピュータ (iPad) を一人一台所持しています。同年9月には文部科学省から「情報教育推進校 (IE School)」の認定も受けています。

災害科学科の立ち上げにあたり、プレ授業ということで初めて同校に講師としてお邪魔したのが2015年6月でした。当時3年生の「地理」の時間と「総合学習」の時間をつないで3時間かけて「震災記憶地図」を使ったアプリ作りを体験してもらいました (写真①・②)。

同校では、2011年3月11日以来、地元の河北日報を中心に日々の新聞を大切に保管されています。それらの新聞記事のいくつかをスキャンさせてもらって、多賀城市内の「津波浸水域」 (作成: 日本地理学会 <http://danso.env.nagoya-u.ac.jp/20110311/map/index.html>) の上に配置してもらいました。写真③は、その時に作った記事の一例です。

震災の発生直後の各地の様子を記録した記事だけでなく、1週間、1ヶ月と経った後で起こる様々な問題は、中央紙よりも地方紙の方がきめ細かく報道します。また、そうした地域の声は、他の地域



写真③ 地図に埋め込んだ新聞記事

の人たちにはなかなか届いてきません。地元の高校生の目線で記事を選び、地図に載せ、アプリの公開を通じて共有することで、「被災後」の生活に対するイメージと問題意識を共有できると思います。

ただ、大人数の生徒がコンピューター教室に一堂に会して、インターネット経由でサーバーにアクセスして地図を更新していくという作業は、思った以上に難航しました。

指導する側の技量や生徒さんの慣れの問題もあり、通信環境や受け手側のサーバーがそうした事態を想定していなかったため、必ずしもスムーズに議論と作業が進んだかという課題が残る結果になりました。

3. 街の震災の跡を地図化する

次に同校に伺ったのは、2015年8月1日です。この日は、生徒有志の皆さんと引率の皆さんの案内で、多賀城駅周辺の津波の遺構を案内してもらいました。その際、前回の授業で作った「震災記憶地図」を使ってもらい、野外で使った際の使用感や、今後の展開について意見をもらいました。

多賀城高校では、生徒会の皆さんが中心となっ

て津波の浸水高標識を設置する活動を行っています。街のあちこちに残る津波の跡（水が到達した跡に泥がついていたり、津波で運ばれた物が傷つけた跡）を探して、その場所の標高を測量器で測って高さを出し、看板をつけるものです（写真④、写真⑤）。



写真④ 多賀城市内に設置された津波到達高標識①（2015年8月1日、筆者撮影）



写真④ 多賀城市内に設置された津波到達高標識②
(2015年8月1日, 筆者撮影)

全部で約300か所設置されていますが、今のところその所在地や高さなどをまとめたデータは表になっているだけとのことです。周辺の景色や当時の様子などをデータベース化して、地図上に展開できないかと検討しています。

フィールドでの情報収集には、iPadや、生徒さんが持っているスマートフォンが役に立つと思います。緯度経度付きの写真を撮り、集約させていくことで多賀城高校ならではの「地図アプリ」が出来ると思いますし、学校への視察や学校交流の際にも使ってもらえるのではないかと考えています。

4. まとめ

日本で2番目、東北唯一の防災専門学科として始まったばかりの多賀城高校ですが、開講に至るまでの活動実績と情報の蓄積には目を見張るものがあります。また、生徒さんの通学範囲は広く、それぞれの地元での経験や資料が集まれば、大きなアーカイブができると思います。

今後、更に若い「震災を知らない子供たち」が高校に入る頃は、新科目「地理基礎」が必修化されます(2022年度より完全実施)。地元の子供たちに震災の記録を見せ、記憶を伝えていくとともに、地域の「防災情報をアーカイブする」活動のモデルとして、積極的な情報発信をしていくことが期待されます。

東日本大震災以後も、甚大な被害をもたらした災害が続いていますが、どのように「その時」を記録し、保存し、活用していくか、高校生の感性と行動力、そしてネットワーク力をICTとどう結び付けていくか、「地図」を媒介とした教材作りはこれからも続いていきます。